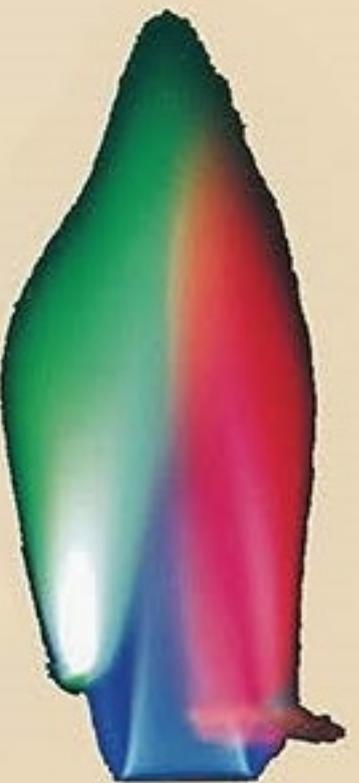


『小説・修復腎移植』



著者・青山淳平

挿絵・山本良秋

発行所・本の泉社

病腎

当初、患者たちは事件を静観していた。

メディアの側にいる水野もはじめは同じだった。

事件の翌日から四日間、他紙はもちろん、自社の特命チームの面々が書いた報道記事のすみずみに水野は目をとおしていた。「レシピエントとドナー、仲介役の妻も逮捕」「再発防止策を早急に整備せよ」、「他の移植病院でもあり得る事件」、「妻の妹、に裏付けとらず」、「焦ったドナーが提供を懇願」、「背景に医療技術の進歩」、「大きな傷跡、ドナーはショック」、「県内の移植実績、恵州会が圧倒」などなど十四本ほどの記事が紙面にのつたが、内容にさしたる偏りもみられず、報道姿勢に疑問を感じることはなかった。

この事件の背景に、移植学会上層部の丸山への嫉妬と、患者本位の医療を推進して発展をつづける恵州会グループに対する日本医師会の反発があるとしても、丸山医師が司直の手におちる、などということは有りえない。三人の逮捕者がでたことは残念だが、それがかえって移植医療への関心を高めることになり決してマイナスばかりではない、と水野は受けとめていた。

もつとも、心配なうごきもでていた。

一つは恵州会病院だけでなく、市立宇和島病院でも独自に調査委員会を立ち上げ、丸山医師が同病院で執刀した五四五例の手術のなかで診察記録の保存が義務づけられている過去五年間の手術はすべて調査することになったという報道と、それと愛媛社会保険事務局（以下、愛媛社保局）が移植手術の書類上の不備を問題にしはじめ、恵州会病院に対して診療報酬返還請求をする可能性がある、という記事である。ともに事件としてのひろがりを示しているだけでなく、事件の本質からまったくはなれたところへ記者の関心がむけられようとしていた。

編集委員室では、愛媛社保局の動静が話題になった。

患者への事前説明や同意確認を文書にしていけない、という手続き上のことが診療報酬返還の理由になるというのは、医療現場の実態からみて、あまりにも形式的ではないかというのである。恵州会病院ではこれまで丸山の執刀した移植手術で六千万円近い報酬を得ており、国の基準を満たさないと判断された場合、全額または一部を恵州会は返還することになる。

「本当にそんなことになるのかねえ」

と囑託で再雇用されている委員が訝いぶかしそうにいい、

「角を矯めて牛を殺すとはこのことだ」

と別の委員も嘆いてみせた。これは権力によるみせしめそのものだが、どうやらこのあたりがこの事件の落しどころだろう、というのが編集委員の一致した見解であった。

いずれにしろ、事件は終息へむかっている。

議論がちょうど一段落したところへ、津和田が入ってきた。

水野のすぐ横の席へ腰をおとすと、さっそく特命チームの仕事ぶりをほめた。

「どうだ、奴ら、気合いがはいつているだろ」

津和田は脂ぎった鼻をふくらませる。

「なかなか上出来。ウラもよく取っている」

水野は素直にほめ、さらにおだてた。

「もうすぐ事件は決着する。それでこの際、うちの社としては移植医療の現状を腎不全患者の立場からルポすれば、新聞協会賞もねらえるぞ」

水野には事件の本質にせまるルポタージュへの期待がある。移植先進地域の愛媛だからこそできる出色の特集がくめるはずで、求められれば特命チームの手伝いをしたい、とひそかに思っている。

水を向けると、津和田は大きな目をむき、

「おい、おい、待ってくれ。事件はこれからだ」

と水野の甘言を制した。

「これからって、関係者はみんな逮捕されたじゃないか」

「バカいっちゃいかん。これからが本丸。サツも社保庁もいよいよ本腰だ」

「本腰？これ以上、いったいなにがある」

「あなたの主治医なのでいいにくいだが、あの医者は不遜で傲慢だ。移植すればなんでもゆるされる、とっている。社会の敵だよ」

「なんだと、聞き捨てならんことをいうな」

水野は気色ばんだ。同室のふたりの編集委員は息をひそめている。

津和田は、ふんと鼻を鳴らし、引導を渡すかのようにいう。

「われわれはもともと雑魚に関心はなかった」

「新聞は公器だぞ。かってなシナリオを書いて世論を操作するな」

「いらんお世話だよ。あんたな、あの医者は変人だぜ。まともな人間じゃない。世のためだ。正体をあばいてやる！」

と津和田はにくにくしげにはきすてた。

水野は殴りつけたい気持ちをぐっとおさえ、冷静にいった。

「サツのお先をかついで犯罪をつくるようなまねはよせよ。事件の本質に迫る検証こそがジャーナリズムの使命じゃないのか」

「ほう、ジャーナリズムの使命ときたか」

と津和田は鼻で嗤い、見下すようにいった。

「あんた、相変わらず、学生のようなご託を並べるなあ。」

「学生のようなとは、恐れ入る。お前こそ、いやなことをいう奴になった」

と、水野はきりかえしたが、津和田は動じるふうもなく、

「まあ、水野、うちの特命チームの報道から目をはなさんことだ」

と、自信たっぷりと言い放ち席をたった。

翌朝、愛媛新報の社会面を開いた水野は、「ん！」と声をもらした。

市立宇和島病院では、丸山医師は院内の倫理委員会を開かず、親族外移植（第三者間の移植は倫理委員会の承認が必要）を行っていた、と報じていた。時期は一九九三年だから十三年前のことである。市立病院の調査委員会は丸山医師が執刀した移植手術の調査結果をまだ発表してはいないので、この情報源はあきらかに、当該患者かその周辺、あるいは当時の院内関係者である。他紙にこの報道はなく、これは特命チームの特ダネである。チームの記者はこの件で院長を問いただし、「現時点で事実確認できないのでコメントできないが、仮にドナーが他人なら、個人的には倫理委を開くべきだったと思う」との所感をひきだしていた。さらにチームは手術を受けたレシピエントを見つけ出し、ドナーにも会い、証言を得ていた。

「友人の妻が積極的にドナーになることを申し出たので、九十三年五月に市立病院で腎移植手術をした」

というレシピエント本人の説明がそのまま活字になっている。

またドナーの女性は記者の取材に対して、

「手術前、丸山医師から、親類じゃないが、本当にいいのか」

と何度も意思を確認されたのだという。

このとおりだとすれば、金銭の授受がないので違法ではないが、明らかに移植学会が定めた倫理指針に反している。特命チームはこの件で丸山医師に取材を申し入れたが、拒否された、と書いたうえで、事件発覚後の記者会見での「臓器提供は赤の他人は絶対してくれない。肉親しかしてくれない」という丸山のコメントをひきあいに出し、記事をしめくくっていた。津和田がいうように警察は本丸へと迫り始め、特命チームの報道はまるでその後押し

をしているかのようである。

新聞をおくと、自宅から水野は内藤へ電話をいれた。

九三年五月の手術ということになれば、内藤が院長をしていたときである。

「先生のところへも取材はありましたか」

「ええ、ありましたとも。記者さんの鼻息はあらかったですなあ」

と内藤は愉快そうに応えた。日本移植学会で倫理指針ができたのは翌年のことなので、この当時、第三者間の移植に関して倫理委員会を開かなかつたとしても手続き上の問題はない、と記者に説明したのだが、記事はそのことにふれてはいない。

「事件だ、事件だ、と江戸の町火消まどいしてみたいに纏まとをふりまわして大騒ぎですなあ。お祭り気分で困ったもんです」

「情報をながしたのは、丸山先生の下にいた研修医でしょうか」

「それはわかりませんが、記事からするとたぶんドナーでしょう。はじめは善意で臓器を提供したとしても、ドナーの心理は複雑です。善意なんてきれいごとで誤魔化しているのは行政の怠慢です。ドナーの犠牲に正当で合法的にむくいるシステムをつくらないと、移植医療はすすまない。倫理委員会なんてものは、外にむけてのたんなる形式ですよ」

「わかります。ただこれから市立の院内調査で、そうした手続き上の問題がぼろぼろ出てくると、丸山先生への印象がいつそう悪くなりますね」

と水野は心配した。

内藤はしばし黙したあと、重々しくいった。

「実は丸さんから相談をうけていることがあります。あなたが宇和島へ定期検診に来られるころには、どうするか、結論をだすつもりです。メディアへ発表すれば大嵐になるので、いま苦慮しているところですよ」

「大嵐？ 苦慮ですか」

「そうです。しかし嵐が去ったあとは、何十万もの患者を救う道がひらける」

「道がひらける？」

「そうですとも、水野さん、あなたにもひと働きを願うことになるかもしれません」

と力をこめた内藤の声がたわってきた。

「いいですとも。しかし、その相談というのは、いったい何事ですか」

「それは、もうしばらくしたら、いいですよ」

「メディアへの発表はいつですか」

「来月のはじめ、惠州会の院内調査の発表のなかで公おおやけにするようになります」

「大騒ぎになりますか」

「売買事件の比ではありません、日本中に激震がはしります」
重かった内藤の声は、軽やかになっていた。

「こんどお伺いするとき、ぜひ聞かせて下さい」

「よろしいですよ。但し、ルビコンを渡ることになりますよ。覚悟のほどを」

「いただいたいのです。私がおぼれたら、あとにつづく者が私の屍をこえて渡ってください」

「ははは、悲壮な覚悟ですな。それを聞いて安心しました」

受話器のむこうで内藤はひとしきり声をたてて笑った。
出勤前、水野はひとり朝食をとり、かたづけをし、台所の勝手口から家の外へ出てプロパンガスの元せんをしめる。食堂へもどり、電話で給食センターに昼の弁当の配達をたのんだ。電気ポットのなかのお湯の量をたしかめ、急須に番茶の茶葉をひとつかみ入れた。食卓に朱色のはし一膳と湯呑みをならべる。それから出社の支度をととのえ、寝室にしている八畳の和室をのぞいた。

久美子はまだ布団のなかにいる。

水野が枕元にしゃがみこむと、久美子はうつすらと目をひらき、

「正ちゃん、もう出かけるの、早いよ早いよ」

と不思議そうな顔をする。秋になって久美子の生活は夜型へかわり、昼近くまで眠っている。枕もとの目覚まし時計は、九時を過ぎていた。

「今日と明日、お義母かあさんは来ないから、お昼は給食センターから弁当がとどくようにしてある。ポットのお湯でお茶をいれて、食べたらいいよ。」

「あら、お母さん、来ないの。いやだあ」

久美子はみけんに皺をよせる。

原因は久美子にあるのだが、彼女はそのことにまったく気づいてはなかった。義母がいる間、一日、テレビの前から動くことはせず、実の母を久美子

はまるで家政婦のようにあつかうので、義母は疲労困憊してしまったのである。昨日、久美子はとつぜん、「あっ、いやだ、苦い！」と叫び義母が淹れたお茶をぷつと食卓の上へ吐き出すと、湯呑みにのこったものを台所の流しにうちすてた。その粗雑な所作を目にし、義母はたまっていた疲れがどつとふきだしたのだという。

二日間、休ませてほしい、と義母にたのまれ、水野は承知せざるをえなかった。

「日暮れまでには帰るから、家のなかにいるよ。夕食がすんだら、ドライブにつれてゆくから、外にでたらダメ。わかったね」

水野がさとすようにいうと、久美子はこっくりうなずいた。

編集委員室で、新しく手がける「えひめの漁村のすがた 今昔」のシリーズ企画をねっていると、有吉裕美から電話がかかってきた。ひさしぶりである。

「心配になって、ついお電話しました」

遠慮がちにいい、有吉は丸山医師のことを案じた。

臓器売買事件の続報記事を読んでいると、なにか悪いことがおこりそうで気持ちが悪入るのだという。丸山医師をよく知る患者側の彼女でさえそうなのだから、なにも知らない世間は丸山医師へうさんくさい目をむけはじめているにちがいないかった。水野はここ数日の特命チームの報道姿勢にあらためて憤りをおぼえたが、有吉にぶつけるわけにもいかず、彼女のいうことに相づちをうち、幾分の説明をくわえながら聞き流すと、

「からだのほうはどうですか」

と気づかった。

おかげさまで、と有吉はずずやかな声で応え、クレアチニン値がまだ2を少しこえているが、夏のころのようなしんどさはない、と打ち明けた。

「なんでもおいしくて、もりもりよく食べていますよ」

電話のむこうで、クスッと笑う声があった。

水野は気分がすこし晴れ渡るのを感じ、

「宇和島で、もし大きな動きがあっても、心配なさらぬように」と、つい、いわずもがなのことを口にした。

「大きな動きですって？」

すぐ有吉が反応した。

「あつ、いえ、移植者の会としては、まだ楽観は禁物ということですよ……」
「そうですか」

「しかし大丈夫です。信じてください」

「もちろんです。でも何かあればおっしゃってください」

「わかりました。約束します」

水野は有吉にたいして、これまでになく連帯感がわきあがるのを感じた。社員食堂で昼食をとって一休みし、午後からはふたたび企画の構想を練った。愛媛の南部地域では、宇和海をおもな漁場とする近海沿岸漁業がふるわず、またひととき日本一の生産量を誇った真珠養殖も衰退し、漁村の高齢化と過疎化が山村の限界集落以上に進行していた。港町はどこもシャッターをおろしたままの店舗がならび、トンネルのようになった商店街を老人たちが手押し車をおして行き交っている。これまで地域が保持してきた村落共同体的な役割は影をひそめ、老いた住民たちの大半は終日、テレビをつけっぱなしにして無為な時間をすごすことが多くなった。水野は数人でチームを組み、十数回前後のシリーズで漁村のいまのすがたを伝えようと考えをめぐらせていた。

「奥さんがお出で、ですよ」

と守衛が思ってもみないことをいつてきたのは、帰り支度をはじめたときだった。

一瞬、なんのことかわからず、

「お・く・さ・ん？　ど・このお・く・さ・んですか」

と、水野は訪問者の所属を尋ねた。守衛は説明した。しばらく前から、初老の婦人が駐車場の出入り口付近をうろろ歩きまわるので声をかけた。婦人が、主人を迎えに来たんよ、と応えたので、さらに問いただすと婦人は水野の名前を伝えた。

半信半疑で一階の守衛室へおりてゆくと、久美子は守衛から差し出されたパイプいすに腰かけ、きよろきよろ落ち着きのない目線できりぎりぎりの車ながめていた。

「どうしたん？」

「うち、今日から正ちゃんと一緒に帰ることにしたの」

「それはいいけど、ここまでタクシー？」

「タクシー、うーん、ちがう」

久美子はくびをゆっくりふった。

「お昼のお弁当食べたあと、歩いてきた」

と、スラックスの先の褐色の靴へ視線を落とした。

「歩いた！　ここまで」

大人の足でも二時間はかかる。

「空が青いから、歩きたくなった。歩いていたら正ちゃんに会いたくなかった」

守衛がいぶかしげな顔で、聞き耳をたてていた。

水野は久美子の手をとって立ち上がらせ、

「そうか、じゃあ車で帰ろう」

いすをたたんで守衛室に返した。地階へおり、車の助手席のドアを開けて久美子を座らせた。地上へ出て、噴水のあがる堀端の国道を走る。カエデの街路樹が紅葉にそまり、高く澄みきった空を飾っている。

「こんど会社へ来るときは、バスかタクシーにしろよ」

「歩いちゃだめ？」

「道に迷ったら困るだろ」

そう応えて、水野はいらだちをにぎりしめるように、ハンドルをつかんだ。

医療関係の本を何冊か読み、妻は若年性認知症ではないか、と心配するようになった。最近、久美子は水道の蛇口やガスせんの閉め忘れだけでなく、同じことを何度も言ったり聞いたりするようになり、日課を几帳面に守っていた生活もくずれていた。義母にはまだ伝えていないが、彼女もうすうす娘の異常に気づいているらしく、いちど病院へつれてゆくように水野は勧められている。

翌日の日曜日も快晴だった。出勤した水野は守衛室へ寄り、妻が夕刻、自分を迎えにくるかもしれないから、そのときはすぐに知らせるように頼んだ。予感の中し、連絡をうけて駐車場の出入り口へおけると、久美子は昨日と同じパイプいすに腰をおろし、夫を待っていた。たしかめると、自宅から歩いてきていた。

帰りの車のなかで水野は念をおした。

「明日からは義母かあさんがいてくれるから、僕の出迎えはいいよ」

「そう、明日はお母さんがいるの」

「久美子はちゃんと家において、親孝行しなくちゃ」

「そうね、お母さん寂しがり屋さんだから、わたし、側にいてあげる」
久美子は明るい顔でいった。

それから十日がすぎた。

新聞の紙面は臓器売買事件容疑者の人物像やその周辺の人間関係に焦点をあてた三面記事がぐっと減り、事件の社会的背景として、ドナーが絶対的に不足している移植医療の現状と課題を問う検証記事もぼつぼつみられるようになってきた。メディアの関心もここにきてやっと事件の本質に向きはじめてたのである。

これは地元の愛媛新報も同様だった。

事件当初、警察や検察が推理し、メディアが期待した丸山医師や宇和島恵州会病院への嫌疑はすっかり晴れたのである。二十一日、容疑者の吉田夫妻が臓器移植法違反で松山地方裁判所へ起訴された。またドナーの菅野容疑者は宇和島簡易裁判所への略式起訴となった。この日をさかいに売買事件関係の報道は散発的になり、記事は紙面のすみへおいやられた感があつた。

津和田の思惑は見事にはずれ、大山鳴動だけの感がある特命チームは近いうちに解散されるだろう、と水野は思った。

いつぼう渦中の、丸山医師はさすがに多忙をきわめていた。水野は恵州会病院から定期検診を一週間のばして、今月だけ第四水曜日にしてほしいとの要請をうけた。丸山は内部調査委員会の調査に全面的に協力せざるをえず、そのため移植者外来にしわよせがでているがご理解ねがいたい、ということである。体調に変化はなく、免疫抑制剤もたくわえが十分にある。水野は検診の延期を承諾した。

十月の第四水曜日、いつもの時間帯に水野は丸山医師の診察をうけた。

前日の二十四日、恵州会病院にたいして厚労省と愛媛社保局並びに県長寿介護課の合同監査がおこなわれていたが、病院は混乱をおしかくし、平静をよそおっていた。

丸山というと、憎たらしいほど事件にも監査にも根っから無関心だった。

丸山はふだんから読むのは医学の雑誌か論文だけで、新聞も週刊誌も手にとることはなく、テレビも観ないから自分にかかわる事件が全国的な話題になっても、当の本人はどこ吹く風だったのであつた。

警察の事情聴取では、丸山はレシピエントの吉田の体調をしきりと気遣つた。

容疑者の吉田のほうは、「先生にはドナーが他人であることも、謝礼を渡す

こともみんな話してあった」と、執刀医の丸山医師をおとしめる証言をした。刑事が真偽をただと、

「まったく知らんことじゃけん、答えようがありやせん」

と、丸山はすっかりうすくなった頭髪を両手の指でかきまわし、

「それより刑事さん、わたしはなんも気にしとりやせんけん。退所したらすぐわたしのところへ来るよう、吉田さんに伝えてくれんかな」

と頼む有様である。

丸山の頭には患者のことしかなく、世間のことなどおかまいなしである。

それでこの日、検診をうけるといふよりも陣中見舞いの心づもりだった水野は、丸山から何の話もでないのでおおいに拍子抜けした。

それでも水野が診察室を出ようとすると、

「内藤先生のところへゆきますか」

と影のある顔をあげた。

「はい、大切な話がある、と伺っています」

ふりかえると、丸山は金魚のように口をぱくぱくさせ、

「心配かけるかも知れんなあ」

と、廊下に立たされた生徒のような顔になった。

港の食堂で水野は「じゃくてん」入りのうどんを一杯食べ、テレビのバラエティ番組をみながら時間をつぶそうとしたが、どうにも落ち着かない。車にもどり、ラジオのスイッチをいれると、NHKの「昼のいきい」からなつかしさをかきたてるメロディーがながれてきた。水野はしばらく市街地の上にそびえる鬼ヶ城の山容をじっとながめていた。

診療所の応接室からみると、その山容の樹林は緑が濃く、いのちの息づかいがする。

内藤は、あけ放した窓からはいつてくる大気をいっばいすいこむと、さっそく話しはじめた。長い話になった。

丸山が相談をもちこんでくる前日までのことである。

佐田院長を長とする宇和島惠州会病院の内部調査委員会は、丸山医師が執刀した過去七十八例の腎移植手術のうち、売買事件のあった一例をのぞく七十七例について、保険証や戸籍謄本などの公的な書類で親族関係を調べ、十六例については問題がないことを確認した。しかしのこりの十一例については、あつかいに苦慮する事実が露見した。十一例ともレシピエントの手術管理台帳にはドナーの氏名が記載されていたが、おかしなことに診療報酬明

細書のドナー欄はいずれも空白だったのである。

「これはどういうことだ！」

委員会の席上、東京の恵州会本部から派遣されていた医事課長が声をあらげた。

腎移植手術の診療報酬は、移植手術を行った病院がドナーからの腎摘出手術の診療報酬も一緒にして社会保険事務局へ請求する仕組みになっている。また移植と摘出の病院がことなった場合（死体腎の場合はこのケースが多い）には、両病院で話し合い、報酬をわけあうことになる。そこでドナー欄が空白ということは、通例、本来なすべき摘出手術の報酬請求を恵州会病院はやっていないことになる。

医事課長は厳しい顔で、空白の十一例を断じた。

「君、これは請求もれではないのか」

「すみません、早急に調べさせます」

事務局長の長谷部は頭を下げ、となりの席の診療報酬管理士に小声でさっそく調べてくるように命じた。

「ちよつと、待ちたまえ」

すぐ医事課長が制し、指示した。

十一例のうち、六例は恵州会で、五例は他院での摘出手術である。十一例ともレピシエントとドナーのあいだに親族関係はない。したがって当然、事件事性（臓器売買）が疑われる。

また、売買の発覚か！と委員たちの顔は青ざめた。

「まず、うちで摘出した六例をあたってくれないか。ドナーがすぐわかるはずだ」

「承知しました」

長谷部が診療報酬管理士をともない、おおあわてで退室した。

委員長の佐田は調べがすむまでいったん会議を休憩したい、と苦り切った顔で提案した。テーブルについていた他の八人の委員たちに異論はなく、トイレや喫煙のためかれらは室外へ出て行った。

佐田は丸山のほうへ歩みより、側の空いている椅子に座り込んだ。

上体をおるように丸山のほうへ寄せ、声をひそめた。

「先生、困りました。どうしましょうか」

「事務のことは分からんが、正直にいうたらええ」

と丸山はつきはなした。

佐田はますます浮かぬ顔になり、

「委員のみなさんの理解は得られると思います。しかし先生、いきなりマスコミに発表となると話は別です。したがって…」

佐田はずりおちそうになった眼鏡を右手でひきあげた。

丸山は意に介さず、おしきるように持論を口にした。

「マスコミに隠すことはありやせん。わたしはそう思いますけん」

売買事件が発覚し、内部調査を世間に約束してからというものの、院長と丸山はなんどもこのことで話し合っている。

佐田は意を決し、自分の意向を丸山にぶつけた。

「先生のお気持ちは尊重します。しかしここは私にまかせて下さい。十一例の内容はここだけのこととして調査委員のみなさんにご理解とご支持をいただき、マスコミ発表のほうはですね、親族外の移植に際して倫理委員会を開かなかったという手続き上の不備については率直にお詫びしますが、七十例のすべてにおいて問題となることは一切なかった、という事実を公表したいと思います」

丸山は組んだ両腕をほどくと、

「けど、なんも悪いことじゃありませんけん、発表したらええがの」

と、なお持論にこだわった。そして白衣のポケットから炒り豆をつまみだすと、口にふくみ、ぽりぽりとかみだした。

佐田は哀願するかのようだった。

「先生、うちだけじゃすみませんよ」

「市立（宇和島病院）かな」

「そうです。市立へ飛び火し、宇和島が大事おおごとになります」

「そんなに大騒ぎせんといけんことかいなあ」

「売買事件どころじゃありません」

「わたしは特別なことをしたつもりはないんじやが」

丸山はぷいと顔をそむけた。

佐田はすがりついた。

「どうしても発表したいということであれば、まず先生が市立にお勤めだったときの内藤院長が何とおっしゃるか、お聞きになつてくれませんか。委員会は内藤先生のお考えに従うようになると思います」

「なるほど内藤先生ですか……」

内藤の名前を聞き、丸山は豆をかむのをやめた。

「どうでしょう、先生」

佐田は哀願するかのように、泣き声である。

「内藤先生にまかせてえんですな」

丸山はたしかめ、佐田はなんともうなずいた。

ばらばらと委員がもどってきた。最後に長谷部が事務員と一緒に席につき、会は再開した。冒頭、長谷部が六例のドナーの腎摘出手術は本来、移植が目的ではなく、腎臓それ自体の疾患のために摘出されたもので、それぞれ個々に腎摘出の診療報酬を受けている、と報告した。呉と坂出（香川県）に病院がある他の五例の摘出についても、電話で問いあわせたところ、同じ回答があった。

医事課長が長谷部にたしかめた。

「つまり、十一例はみんな、本来、すてていた腎臓ですね」

「はい、疾患のある病気の腎臓でした」

「それを移植につかった？」

医事課長はくびをひねり、妙な顔になった。

居ならば委員たちは、ひそひそ互いに言葉をかわしはじめた。

書類上は医事課長の指摘のとおり、十一例はすてていた腎臓である。なぜそれを移植につかったのか。長谷部は答えにこまっ、佐田院長と丸山医師の双方へ視線をはしらせ助けをもとめた。佐田は腹がすわったのか、澄んだ目をしている。そのかたわらで、丸山は平然と口の中の豆をかみつづけていた。

ひとつ咳払いをしてから、佐田が説明した。

「みなさん、もうお分かりのように、十一例は病気で取りだした腎臓をつかった移植です。ドナーとなった患者さんには、もともと廃棄する腎臓ですが、移植につかうことについて、事前にご理解とご承諾をいただきました。また、レシピエントの患者さんには、丸山先生のほうからも十分にご説明し、みなさん納得されたうえで病気の腎臓、といっても病変部位はきちんと修復して、移植しました」

委員たちは、やはりそうだったのか、と互いになずきあい、明かされた事実の重大さにほおをこわばらせた。臓器売買どころの話ではない。

少し間をおき、佐田が遠慮がちに委員たちへ質問をもとめた。惠州会本部から派遣された移植医療に明るい外科医の専務理事が尋ねた。

「病気の腎臓ということですが、それぞれ病名はわかりますか」

「はい、そのことなら丸山先生に回答してもらいます」

と佐田は丸山をうながした。

尿管狭窄、ネフローゼ症候群、腎動脈瘤、それに良性腫瘍の四種類で、実際に患者を診ている臨床医として、まったく安全とはいえないが、それぞれのレシピエントにはメリットが多いという判断で移植につかった、と丸山は説明し、さらにつけくわえた。

「透析不適応の患者は、それは苦しい状態におかれとるけんなあ。話すと、捨てる腎臓でもええけん、欲しい欲しいとみんないうけん、それでやってみようということになった」

「丸山先生、それ、うちが最初ですか」

「いや、前の病院のときからです」

「前、というと市立宇和島病院？」

「そうです。たしか初めは十数年前でした。外国の文献読んどったら、小径腎がんを、がんの部位をとりのぞいて移植につかったケースがありましたけん、それでやってみようと。市立のときにはたぶん二十例くらい、それに呉の病院にも応援にいつて六例ほど、ざっと三十七例ほどになります」

「三十七例！」

と委員たちがいつせいに復唱し、メモをとる手をとめ丸山を凝視した。丸山には動じた風はないが、佐田は青白い頬をかすかにふるわせていた。

病気の腎臓を移植につかったはならない、という法律も厚労省の通達もまた日本移植学会の倫理指針もない。そもそもそのようなことは想定されていないからである。だれもが気がつかない方法で、丸山は透析に苦しむ患者を助けてきたのだった。

委員はみんな、わかっているだけでも病腎移植三十七例という、暴挙とも壮挙ともとれる事実を前にし、あっけにとられ、言葉をうしなつた。

専務理事が司会役をひきうけ、委員は病腎移植について相互に知見を述べあい、率直に意見を交換し合った。似たような手術がいわば特殊な事例として、これまで内外の学会で発表されていた。しかしひとりの医師が、病腎移植を日常的な治療方法のひとつとして、これだけ多数実施したのは世界でも丸山医師において他にはいない、という認識でみんなは一致した。生着率は生体や死体腎と比べても遜色はなかった。委員会では病腎の利用は有力な方法になりうる、という一応の見解に達した。

専務理事が疲れも見せず、力強くいった。

「丸山先生、さつそく論文におまとめになって、学会で発表しましょうや」

「お言葉ですがの、わたしはどんな学会にも入ったりはせんけんなあ」

と丸山は気乗りしない顔で応えた。

「移植学会には、お入りでしょ？」

「それが、もうだいたいぶまえに会費未納でクビになつとります」

「しかし論文は書ける。ぜひ書いていただきたい。三十七例となると、研究発表するには十分な数ですよ」

「はあ、まあ、それは」

「一年、五年、十年と、それぞれ生存率をお調べですね」

十五年前、腎動脈瘤で摘出した腎臓を移植した農夫はいまも健在である。

「だいたいわかりますが……」

「だいたい？」

「それが、実はわたしはなんの記録もとっておりませんので」

「カルテがあるはずですが」

「カルテもきちんとは書いとらんので」

丸山はさすがにバツが悪いのか、かぼそい声になった。

「それでも基本的なことは記載されているはずですよ」

「市立のものはどうですかなあ。五年たてば保存期間が過ぎますけんなあ

……」

丸山はますます小さな声で申し訳なさそうにいい、くちごもった。

佐田はここぞとばかりに発言をもとめ、委員全員の意向をたしかめた。

「論文の件はともかくですね、丸山先生はこの新しい移植を国に認めてもらいたいというご意思がとおりです。われわれとしてもそのことに異論はないと思います。しかしいきなり十一例の病腎移植をマスコミに発表すれば、おそろく誤解が先行し、混乱が予想されます。とくに市立は最初の舞台だし、こちらのほうが件数もずつと多い。私どもが一方的に発表すれば、市立に多大なご迷惑をおかけするおそれがあります。それでこの際、まず丸山先生の病腎移植を支援されてこられた内藤先生のご意見をお聞きしたい、と考えております。内藤先生のご意見を最大限尊重し、マスコミ発表のありかたを決めたいと思います。みなさんの率直なお考えをお聞きします」

専務理事がすぐに手を挙げた。

「院長、あなたは内藤先生がなんといわれるか、すでに予断があるようで

すな。それをはっきりおっしゃってくださいよ」

「はい。論文を書いて、学会で発表せよ、といわれると思います」

「そうでしょう、それがいい。われわれと考えは同じです」

専務理事はうなずき、みんなの顔を見回した。だれも異論はなかった。ひとり丸山だけが、窓外の上空であかね色にそまりはじめたすじ雲をながめていた。

翌日の日曜の夜、惠州会のちかくの料理屋で丸山は内藤にあった。

売買事件以後、病腎移植のことで丸山はすでに一度ならず、内藤に相談をもちかけている。丸山は、親族外の移植十一例の事実を公表せざるをえないのだから、その十一例は売買とは無縁の病腎の移植だとマスコミに説明すればすむことだ、という考えだった。丸山には病腎移植が特別な医療だという認識はなく、移植をうけた十一人の患者も全員元気に社会復帰をしていた。丸山が自分の考えを内藤に話すと、市立もおおいにかかわることなので、調査委員会では病腎移植の公表をどうするのか、その結論を聞いてから、自分の意見を述べたい、と内藤は答えを留保した。

その委員会は、学会での論文発表という常識的な方法をえらび、くわえて委員長の佐田は、最終的には内藤の判断を尊重するというのである。

「きわめて日本人的な結論ですなあ」

ゲタをあずけられたかっこうの内藤は、委員会を少し皮肉った。丁重だが、外堀も内堀もうめ、降参しろとっているようなものである。かりに丸山に論文発表の場があたえられても、学会は無視するか、徹底してたたくだけで、病腎移植がひろく国民的な関心をひくことはない、と内藤は見通している。かれの腹はすでに決まっていた。

「移植を待つ患者さんがいっぱいいますけん、はよ、なんとかせにやいけん」

丸山が自分の思いを内藤にぶつけると、内藤はぐっと上体をのりだし、たしかめた。

「丸さん、あなた、黒船になる覚悟はおありか」

「黒船……、開国、つまり発表せよと？」

「そうです。マスコミに発表し、世論という外圧で学会や厚労省を動かし、病腎移植への大きななぐれをつくるのです。学会発表のようにお行儀のよいことをしては、透析でうるおっている病院や製薬会社は安泰で、なにも前にはすすみませんよ」

丸山は肩をおとし、ぼそっと本心を吐露した。

「先生、わたしは、静かにしときたいけど、いかんのかなあ」

「ここまで来たら、もう後にはひけません」

「世間に訴えろ、と」

「そうです。その通りです。ただしはじめは猛烈なバッシングがあるかもしれませぬ。しかし丸さん、患者さんはあなたの強力な味方ですよ。もちろん僕も応援します」

内藤は徳利を手にすると、丸山の杯に地酒をなみなみと注いだ。

このようないきさつで、病腎移植のマスコミ発表が決まった。

発表の日は十一月二日である。惠州会の委員会は、病腎移植十一例をふくめた丸山移植の調査結果の発表をするための準備にはいった。また内藤の進言をうけ、市立病院でも丸山が執刀した五百四十五例の腎移植について、のこされている書類をもとに病腎移植の調査をはじめた。

内藤は話し終えると、紙コップの茶をのみほし、ふっと肩で息をついだ。

水野も紙コップを手にし、内藤の背後の窓へ視線をうつした。いつの間にか、鬼ヶ城は中腹までうす暗い雲につつまれていた。雨がふりだしそうである。

発表はあと八日後である。

「先生、売買事件のほとぼりがまだありますから、ちょっと心配です」

水野の頭に津和田が特命チームを叱咤激励するすがたがうかぶ。今度は事件ではなく純粹に医療の問題である。しかしこのチームには医療専属の記者はいない。病腎移植を事件の感覚でとらえてしまうと、猟奇的な面を強調する記事になりかねない。

「まあ、たいいていの記者は学会のいうとおりに書くでしょう。だから製薬会社や学会とのしがらみがつよい中央紙は、バッシング一色になりますよ」

「地元紙はどうでしょう？」

「学会と丸さんの患者、記者がこのどちらを向くかです」

「地元だからこそ、患者によりそった記事が書けますね」

津和田に移植者の会の患者を紹介しよう、と水野は思う。

「そう願いたいのが、惠州会はこの点が甘い。中央紙にのせられ地元紙も大騒ぎするおそれは多分にありますよ。もつとも大騒ぎは、こちらとしては願ったりかなったりです。学会と厚労省を相手に、マスメディアの土俵の上で大相撲がとれるわけですから。そしたら水野さん、あなたもいよいよ出番で

す」

内藤は組んだ脚をほどくとソファからはなれ、窓辺へあゆみよった。テーブルにおいたセカンドバックを手にすると、水野もたちあがった。

「心づもりはできています」

と水野はいった。

内藤は窓外をみつめながら案じた。

「丸さんはおいこまれますよ、純粹すぎる男だから孤立させたら危ない」

「いただいたいのです。できるだけのことをやるつもりです」

と水野が応えると、内藤はふりかえり気づかった。

「雨になりました。お気をつけて」

白い雨あしが、鬼ヶ城をすっぽり包んでいた。